

戦争を知らない世代へ 20 愛媛編

慟哭の伊予灘

—松山・今治・宇和島空襲—

創価学会青年部反戦出版委員会

第三文明社

戦争を知らない世代へ ㊥愛媛編

慟哭の伊予灘

—松山・今治・宇和島空襲—

創価学会青年部反戦出版委員会

第三文明社

戦争を知らない世代へ②

慟哭の伊予灘——松山・今治・宇和島空襲

昭和51年7月26日 初版第1刷発行

編者◎ 創価学会青年部反戦出版委員会

発行者 栗生一郎

発行所 株式会社 第三文明社

郵便番号 101 東京都千代田区猿樂町2-5-4

振替 東京5—117823 電話 03(294)8731(代)

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 星共社

落丁・乱丁本はお取り換え致します 0036—7020—4438

発刊の辞

昭和二十年七月二十六日。松山空襲の日。この日、私は母に手を引かれて母の実家・伊予郡中山町佐礼谷へ逃げた。郡中駅まで電車で。この電車も時折り停車した。「敵機来襲」に、皆は「電車の中でうずくまって……」。当時私は三歳。電車を降りて夜道三里半を眠りながら歩いた。疎開先へ着いたのが夜の十一時。そこから見る松山方面は「赤かった」という。

この時の様子を見ると、この空襲によって松山市の中心部はまったく灰燼に帰し、罹災戸数一万四千三百戸、死者二百五十一名（男百十七名、女百三十四名）行方不明八名、負傷者は数えきれないほど、となっている。

この松山空襲より先に宇和島（昭和二十年五月十日、罹災戸数五百五十三戸、死者百七名、行方不明二名）が、そして、松山のあとに今治（八月五日、市街地の八割が焦土に。死者四百五十四名、全焼家屋八千百九十九戸）がB29の猛爆撃に見舞われた。

この年に生まれた子供も三十一歳。当時を知る人は少しずつ世を去り、「戦争を知らない子供たち」が社会の中心になって活躍する時代になった。その人たちの一部に「戦争美化」の風潮が

あることを耳にするとき、

「あの広島、長崎の悲惨な歴史的実事は、たんに日本の悲痛な経験であるばかりではなく、人類の貴重な経験であるはずであります。日本自身から強い信念と、勇気とをもって、核兵器全廃に向かって必死の努力をつづけるべきであります。これが日本の、人類の未来に対する歴史的使命であり、未来人類に何を贈るかといえば、これほど価値ある仕事は、ほかにないと思うのであります」

との池田会長のことばが我々青年に『使命の声』として響いてくる。

そして、未来絶対平和確立に眼を向けた青年、学生の有志が立ち、ここに一冊の『反戦の結晶』を誕生させたことに心から敬意を表したい。本書に収録された憤怒と悲痛な『原体験』は、時とともに平和への力強い叫びとなることを確信してやまない。

この空襲によって尊い生命を失った犠牲者の冥福を祈るとともに、本書が『日本一うるわしい仲の良い愛媛家族』構築のバネになっていくことを願っている。

昭和五十一年七月二十六日

創価学会青年部

愛媛県青年部長 築山良弘

目次

発刊の辞

●第一章 松山空襲

『無事逃げろ』が最後の言葉	片山美代子	10
夢中で歩いた五十キロ	武智貴久美	13
裸足で逃げた11時間	村上昭正	16
この怒りをだれに	宮本糸江	21
死ぬときは一緒だよ	松田信一郎	24
すべてを失った悲しみ	松本和子	28
夫を死なせた憎い戦争	小倉スエ	32
これが夫とは	豊崎トシノ	36
乞食がうらやましい	石橋千恵子	39
地獄絵図を見た人びと	河端シズエ	42

焦熱地獄……………	山崎進一	45
役に立たない避難訓練……………	柳原ヨネ子	48
異臭の町……………	十代田昭江	51
責任の強さがあだに……………	松島忠雄	54
戦争なんかもうお断わりじゃ……………	森川サツキ	57
二度と戦争には手をかさない……………	宮内道善	60
星の夜空が真っ赤に染まり……………	長谷部光栄	63
むし焼きの死体……………	高岡静子	66
無惨な全身大火傷……………	河野君代	69
やけどで断末魔の人たち……………	渡部ヒサ	72
狂気寸前の逃走……………	金子益治	75
一生で一番恐ろしい思い……………	高木貞子	78
熱湯の川……………	下本春子	82
『生きる』執念……………	岩崎ミチ子	85
戦争後死んだ息子……………	三好敬子	89
焼けちぎれた手……………	坂本時子	92

我が家に焼夷弾の直撃が.....松岡重忠

乳母車の幼児と必死の逃走.....大橋千代子

ある老婆の死.....清水直一

職業軍人の妻の悲しみ.....和田フジ子

戦争で夫も子も失う.....野本サダ子

用水池の親子.....石田サワ子

狂気の人間.....土屋佐滴子

火だるまの同級生の死.....多勢タキ子

恐怖ノ 悲惨ノ これが青春か.....野本和子

ある重傷の男の叫び、殺してくれ.....藤原サカエ

我が子を探し求めた母の執念.....千三木貞恵

空襲・別離・再会.....串山岩男・串山信枝

●第二章 今治空襲

「降伏せよ」とビラが舞う.....菅 静枝

父の位牌を胸に.....檜垣イチ子

蓮の茎にしがみついた数時間……………永井静子

あつノ むしろの下に死人の山が……………菅 フテヨ

逃げ歩くところで死人の対面……………村上千代子

折れた右手で逃げた数時間……………浜田シズ代

この世の地獄絵……………上垣タズ子

“お国のため”と涙も出せず……………楠橋清美

教室から見た骨の山……………白石継男

空襲下に散った二十二の幼い生命……………鷗久森富江

まだ、生きている……………越智 瞳

●第三章 宇和島空襲

恐怖におののく防空壕の中……………井上幹朗

雨の中の母子の逃走……………井上イサ子

出征・戦死・空襲、そして終戦……………杉森ミサオ

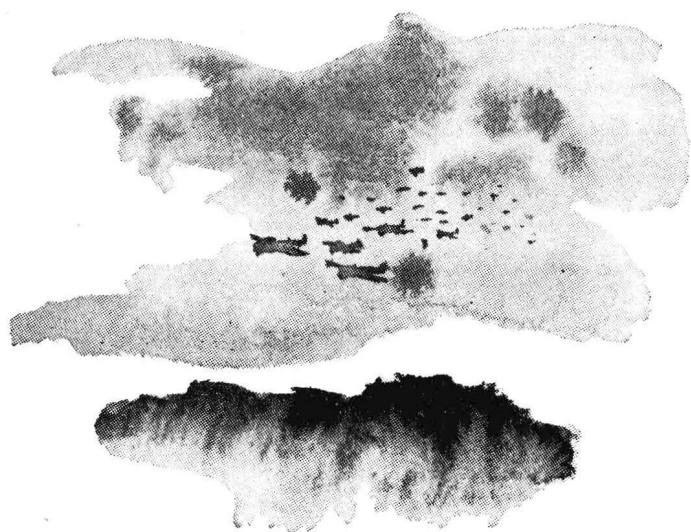
血で染まった病院の廊下……………島川清子

サイレンにおびえる妹……………竹内ミドリ

青春を奪った最初の一撃.....	曾根和子
忍耐だけの青春.....	豊田愛子
業火に消えた小さな命.....	三瀬トシ子
泥沼の戦時下.....	豊岡ゆたか
帰らなかった父.....	柴田梅子
火の雨から子供を守って.....	山本まさ子
生き埋めの五時間.....	福井チヨ子
宇和島が燃える.....	晴ミヨ子
よそ者、帰れノ、と冷たいしうち.....	楮元民代
気も失わんばかりのレンガの雨.....	菅原クニ子
姉のお産に必死の逃走.....	河野綾子
あとがき.....	

第一章

——松山空襲



『無事逃げろ』が最後の言葉

片山美代子



年齢 四十九歳 当時 十九歳

現住所 温泉郡重信町西丘

当時 松山市松前町

職業 主婦

運命のあの日から三十年が過ぎました。松山が巨大な火柱に包まれ、緑の町が焦土と化したのは、昭和二十年七月二十六日、夜十一時十五分ぐらいだったと記憶しています。それは私の十九歳の夏でもありました。

当時、毎日定期的にB 29 が到来してきました。今日も見廻りで帰るだろうぐらいの人びとの安易な期待を裏切って、編隊に編隊を組んでの来襲に、小さな松山の町は、ひとたまりもありませんでした。三度、四度とつづく爆撃に、「美代子。本ものだー。弟を連れて早う逃げろ。」との父の言葉で、私と弟は、それぞれ一枚のふとんを頭からかぶり、火のまわっていないところを見つけては、必死で郊外へ逃げました。幼い弟の手をとって、あるときは川の中、あるときはどぶの中をはいずりまわって、顔中泥だらけにして、空を見上げては、憎いB 29 の反対方向へ、そこそ死にもの狂いで走りつづけました。

ふだんならば平和な月夜の晩も、ヒューン、ヒューンと投下される赤や青の焼夷弾であたりは真昼のように明るくなり、私の眼に映るその状況は、地獄そのものでした。人びとは降り落ちる爆弾を背に、「ギャアー、ギャアー」とわめき声をたてながら、あてもなく逃げ回るだけでした。腰をぬかして動けずに、ただあたふたと地面にはいつくばっている人もいました。

私と弟は、味酒町をぬけ衣山街道に出て、付近の田んぼの中で地獄の一夜を過ごしました。やっと一夜が明けたかと思うと、翌日はグラマンが、生き残りを機銃掃射しました。あちらこちらで時限爆弾がウワーン、ウワーンと不気味な音をたてて破裂し、次々と犠牲者が出ました。裸足で着のみ着のままの私たちは、昨夜別れた父と姉を探しに古町の自宅の焼跡にもどりました。姉はなんとか無事に見つかりましたが、父が見つかりません。絶対に無事に助かって、どこかにいるはずだと信じて、隣の町からその隣の町へと探し回ったのですが、どうしても見つかりません。怪我人を収容している避難所へ行ってみました。父の姿はありませんでした。

高鳴る胸をおさえて、知っている人を見つけては、父の消息を尋ね求めましたが、だれも知っている人は現われませんでした。不安と悲しみのなか、親切な人が、おにぎりや梅干しを手の中に入れてくれましたが、ひもじくてお腹はベコベコなのに、口の中に入りませんでした。食べる気になど、とうていなれないのです。あちらこちらで、真っ黒焦げになって死んでいる人をこわごわ見ている。「もしや、私たちの父ではないか……」と本当に辛い辛い思いをいたしました。そ

それでも「きつと何処かで生きていくれるノ」を一つのかすかな望みとして一所懸命探しつづけました。しかし遂に、あの優しい父の「無事で逃げてくれよノ」の一言が、私たちへの最後の言葉となってしまう、私たちのもとへは帰ってくれませんでした。

父もなく家もなく、早くから母も亡くなっていましたので、頼る人もなく、私たちはみなし児となってしまうました。松山空襲より二十日遅れて終戦。半年後、家の横にある井戸の中より父の変り果てた、あまりにも残酷な遺体が発見されました。本当にひどい、ひどすぎる。私たちがどうしてこんなめにあわなければならぬのか、私はこの深い悲しみと、どうしようもない悔しさ、煮えたぎる憤りを戦争という悪魔に対して今でも持ちつづけているのです。

夢中で歩いた五十キロ

武智貴久美



年齢 四十七歳 当時 十六歳

現住所 松山市湊町

当時 松山市大街道二丁目三六

職業 化粧品小間物商

空襲前、私の家は松山の中心街（大街道二丁目）で化粧品、小間物商を営んでいた。商品は統制され、貴金属は政府に安く買いあげられ、絹物は切符制で仕入れなくてはならなかった。果ては、化粧品の容器まで製造中止となり、お客様は古い空びんを持って買物に来ていた。

店の者は、次々と徴用や兵隊にとられ、家に残るのは女、子供だけになっていた。そうなるど商売どころではない。昼は空襲警報のたびに店を閉めて、防空壕へ避難しなければならなかった。B29は、そのころひんばんに松山の上空を通過していた。

そして、恐れていた松山空襲の日が、遂にきたのである。七月二十六日の夜半、警戒警報のサイレンに引きつづき「空襲警報」「敵機来襲」と、間断なく流れる情報に、あわただしい緊迫した空気が流れる。急いで階下へ飛びおりた私の逃げるとき分担は、非常袋を二つ両肩から十文字にかけ、当時六歳の弟を連れて逃げ出すことだった。いざとなると、あたふたするばかりでな

かなか思うように動けなかった。

古町のほうでバンバツバンと花火のような音がしたかと思うと、西の空が真っ赤になって燃えだした。外から父にどなられ、私と弟はふとんをかぶり、大きな風呂敷包みを背負って外へ飛び出した。人びとが、我先にと石手川のほうへ走って行く。弟は恐がって歩かない。しかたなく私は弟を背負って走った。しがみつくので、よけいに重い。肩にかけた非常袋も、その時は千貫の錘のように感じられた。

八坂小学校の前に出たとき、私たちのすぐ頭の上にB 29……。ハッと我を失い、なだれ込むように学校の防空壕へ身を隠した。同時にヴグーンノと異様な音。外がバツと明るくなった。瞬間、私は「もう駄目だ、死んでしまう」と思い、本当に生きた心地はしなかった。入口のほうへ這い出ると、外は真っ昼間のように明るい。火の手はどんどん迫ってくる。私は無我夢中で中村橋へ出て、田んぼの中へ逃げ込んだ。あぜ道はぬかるみで、急げば急ぐほど前へ進まない。何度も足を滑らして、田んぼの中に転げた。靴には泥水が入り走りにくく、背中の弟は、おびえきった声で泣き叫ぶ。やっこの思いで国道へ出て、うしろをふり向くと、立花の方面はごうごうと荒れ狂う火の海であった。あとで、防空壕に残り逃げ遅れて亡くなった数多くの人のことを聞くにつけ、もしあのまま防空壕にいたらとても助からなかったと思った。

石井小学校へ避難せよと指示されていたが、その夜、私は弟を背負って五十キロ、四時間ちか